

ICCT-2000 報告

第 16 回 IUPAC 化学熱力学国際会議 (16th IUPAC Conference on Chemical Thermodynamics, ICCT-2000) が 8 月 6 日から 11 日の日程でカナダ, ハリファックスの Dalhousie 大学を会場として開催されました。第 55 回カロリメトリー会議および第 10 回核物質の熱力学シンポジウムと、同時かつ完全に一体の形でした。実行委員長は Dalhousie 大学化学教室教授で本センターとも関係の深い M.A. White 教授が務められました。

参加者は 40 カ国から 462 名 (うち学生 85 名), 発表件数は 527 件で, いずれも 1996 年の ICCT-96 とほぼ同数で, 化学熱力学関連の国際会議としてはこれまでで最大級でした。我が国からも 71 名の参加がありました。これはアメリカからの参加者数には及ばないものの, 開催地カナダの 64 名をしのぐ参加者数でした。センターからは徂徠, 松尾, 稲葉, 長野, 山室, 宮崎, 齋藤の各スタッフ, 譚客員教授, ならびに日本学術振興会のフェローとして滞在中のアシスさんが参加しました。

会議は受賞講演 (4 件, うち 3 件は共同開催のカロリメトリー会議が制定している賞, 稲葉さんの受賞については別項を参照してください), 全体講演 (8 件), 招待講演, 一般講演で構成され, 受賞講演以外はいずれもテーマの決まった 16 シンポジウムに分類されていました。また, 円卓討論が行われたシンポジウムもあったようです。発表形式には口頭とポスターがありました。

大きな会議で最大 7 セッションが平行して開催されたため, とうてい全体について報告することはできません。私自身が見聞した範囲で感じたことをあげてみましょう。Wakeham 教授 (Imperial College of Science, UK) のロッキーニ受賞講演は, 新しい測定装置の開発の重要性と, それが現在では電子計算機の発達とも絡み合って, 電子計算機による解析を前提とし, 比較的複雑なものになりつつあることを強く印象づけるものでした。DiSalvo 教授 (Cornell University, USA) の全体講演では, 物質を構成する元素の数にたいして超伝導転移温度をプロットしたものを使って, 室温超伝導体の実現には 8 元化合物が必要との説得的経験則が語られました。また, 微細加工技術を使ったマイクロ熱量計についての発表には多くの聴衆が集まっていました。

会議は, Dalhousie 大学の講堂と教室を使った大変簡素なものでしたが, 議論するには何不自由することはありませんでした。具体的なお世話もハリファックス市内の 3 つの大学の研究室が関係するだけというものだったようですが, 運営自体は大変良く準備されていました。日本で開催される国際会議はちょっとやりすぎなのかも知れません。

(齋藤一弥)